

講演会「西国街道 ～しまもと・大山崎～」

平成 25 年 11 月 16 日（土）

福島 克彦 氏



今回は西国街道と島本地域との関わりについて簡単にお話をさせて頂きたいと思います。

さて、一般的に西国街道とは、京都から大阪を通らずに神戸方面へ向かう街道の事です。古代は、西国街道自体が山陽道であり、都が長岡京、あるいは平安京に移ってきますと、九州の大宰府と京都を結ぶ重要な街道として位置づけられるようになります。長岡京ができた要因のひとつとして、水陸の便が非常によかった場所だという事があります。この西国街道と淀川が1番近いのが、大山崎や広瀬の辺りで、水陸の交通路の結節点として大変、機能していたという事が言えます。

中世鎌倉・室町時代には、西国街道は播磨大路や播磨街道という表現が使われています。近世江戸時代の山崎道は、参勤交代の道、参詣道、あるいは南北道との接点であるところが大きな特徴です。18世紀の半ばに、『行程記』という萩藩主の参勤交代路として江戸までを描いた絵地図の中に水無瀬離宮に向かう道が描かれています。南北に走る道がたくさん造られ、当然その間の結節点に道標が造られています。こういった街道沿いにある道標は、東西の道との接点になっていて、片方は淀川の水運の船着き場、あるいは渡し場に直結している、ということになります。で、西国街道の特に広瀬、山崎の周辺の特徴はまさしくその淀川の水運と直結していたということになります。

さて、地域との関わりを考える場合、広瀬は大変重要な歴史を持っております。その内のひとつに、後鳥羽上皇が造った水無瀬殿があります。発掘調査で当時の軒平瓦が沢山見つかっており、水無瀬殿がどの辺りにあったのか大変注目されます。藤原定家の『明月記』に水無瀬殿についての記事がでています。水無瀬殿が造られたのが正治元（1199）年で、その頃に道が造られたと言われている。同時に広瀬村の始まりでもあったと思われます。正治2年閏2月23日には、水無瀬殿に上皇がやってきて、皆瀬を改め「広瀬」と呼んでいると書いています。広瀬という名前がこの頃には、できたのではないかと思います。この水無瀬殿は淀川水運とも繋がっており、建仁2（1202）年2月14日水無瀬殿に釣殿があり船が直接水無瀬離宮に入ることができたという記事が出てきます。もうひとつ、鎌倉時代には播磨大路沿い、西国街道沿いに宅地が並んでいて完全に成立していたと思います。山崎の住民達が色々と活動しており、建永2（1206）年4月3日の記事に、山崎の民家が経営している離宮八幡宮の日使頭祭という重要な祭礼があると書かれています。祭礼の行列が播磨大路（西国街道）通って八幡まで行くという事から、大路という最重要な道として認識されていて、それを藤原定家が記録していたという事がわかります。それから、建保5（1217）年2月24日には水無瀬殿を新しく造り、同時に大工事をする関係で魚市を移すという記事がでてきます。ここから、淀川水運との絡みが見えてきます。こういった後鳥羽上皇の水無瀬殿、居館が造られた記事だけ見ても、淀川の水運と播磨大路と言われている西国街道のルートが、重要な意味を持っていて、それが接近する場所だからこそ、こういう魚市場ができたりするということが想定できます。

時代が下って、この山崎、島本辺りで重要なのは、割符屋を営む広瀬大文字屋です。鎌倉・室町時代になりますと、東寺は西日本のあちこちの荘園から年貢やお金を運んできて、それを東寺の

経営にあてていきます。年貢を運ぶ為には船を利用したり、お米を売ってお金を持って帰ります。ところが、当時は中国の宋銭とか明銭といった銭貨を使っていて、これが大変量がかさばります。人間や馬で、運んで来るとなると大変な労力になります。それで、割符と言われる金銭の取引の決算に使用された証紙、今で言えば小切手みたいなものを使ってお金を途中で換金するというようなことを行っていました。その割符屋と言われた人達が広瀬に住んでいたということが、『東寺百合文書』に書かれてあります。同時に、この山崎・広瀬は、西国街道のルート沿いにあるので、各地の荘園の担当者が、陸上交通を行き来するようになります。皆が立ち寄る場所でもあったんで、割符屋さんのような場所があったと考えられます。

それから、天文 13 (1544) 年戦国時代の頃の史料ですが、摂津とか、高槻、茨木、あるいは島本もそうかもしれませんが、その色んな薪とか柴とかそういう物を西国街道沿いに運んで、それを船に乗せて、八幡まで運ぶという流通または運送がなされていたという事が分かるわけです。だからこの西国街道と淀川の水運、あるいは渡し場が大変近かったのも、それを中継するポイントとしても大変意識されていたという事が分かります。

次に近世の馬借について押さえておきたいと思います。江戸時代になりますと、街道沿いは色んな人達が馬を使って荷物を運び、馬に人をのせて旅をするようになります。それを当時の幕府が認める体制がとられるようになります。これを駄賃馬と言い、駄賃をもらって馬を動かす制度が整ってきます。山崎にも駄賃馬が飼われていて、参勤交代や大名達がやって来る公的な業務があると馬を貸しました。ところが馬を貸すだけでは、儲けにならないので、日常的には馬借業の仕事をして、幕府の業務で馬が必要な時にはすぐ対応できるような体制になります。慶長 11 (1606) 年、『奥田文書』という史料の中で広瀬村は、山崎と一緒に業務を担当するよう命じられています。街道沿いの集落を統合化していくということなんです。

さて、街道沿いに町が出来ていくという景観の特徴的なものを最後に示していきたいと思います。山崎の町の様子を描いている地図を見ると山崎という町が、西国街道に沿って続いている様子が良く分かります。同時に「保」と言われる山崎の地縁的な共同体があるんですが、この共同体が街道沿いにずっと並んでいるという事が分かっております。これはかなり特徴的なもので、油売りも絡んでいたということもわかってきています。続いて「保」という言葉ですが、簡単に言えば、近代になりますが冠婚葬祭を手伝うような間柄の地縁的な共同体です。山崎の町が西国街道と密接な関係にあったということがよくわかります。この保は、鎌倉時代の中頃には出揃っており、かなり古い段階から地縁的な共同体が、地元で機能していたことになります。島本町、山崎の地域も含めて、西国街道を考える地点として、淀川水運と西国街道との関わりがあるということ。もうひとつ、道標から、調べていく時に色々と文献史料と合わせて考えることができるということ。それから最近、島本町で大変注目されてます水無瀬殿ですね。発掘調査も、西国街道と絡めて考えることが大変重要な視点になるということ。その辺りを今日は指摘させて頂きました。今、自治体に広域連携というのが求められてまして、こういう西国街道で色んな自治体と連携して調べていくことが、大事な意味を持っていると思います。今後、島本の皆さまと大山崎も、一緒に調べることができたらと思いますし、ほぼ共通の歴史がありますので、是非これからも皆さんと協力してやらせて頂けたらと思います。ご清聴どうもありがとうございました。